

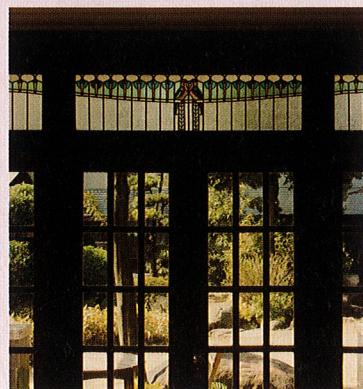
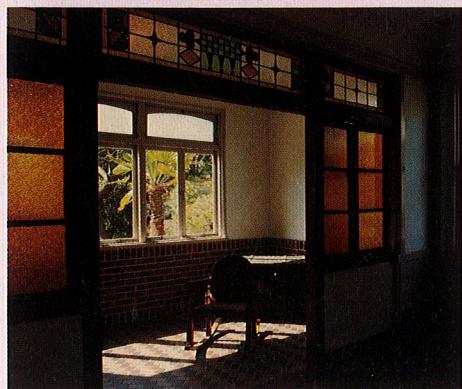
樟木館日和

しゅもくかんびより◆第五号



発行日:2012年3月24日

発行:文化のみち樟木館



占領下時代の井元邸、あるメイドの追憶
変わりゆく時代とともに生き続ける館、樟木館。大正末から連なる記憶には、そこに生きた人々のさまざまな物語がありました。名古屋市港区在住の山中節子さん(78才)は静かにたたずむ樟木館(旧井元邸)の正面にあるシユロと楳(まき)の木を愛おしむかのようにゆっくりと見上げながらぽつりと言った。
「この木は、全くかわらない。あの日のままだわ。」
その眼差しは60年前の遠いあの日の記憶の中をみつめていた。

占領下時代の井元邸、あるメイドの追憶

占領下の名古屋

戦後の名古屋市に米軍を主力とする連合国軍が進駐したのは、1945年の9月。陸軍航空隊の司令部が市内におかれ、米兵家族向けに現在の白川公園にアメリカ村が建設されました。木造の西洋住宅の他に教会や社交クラブ、南側にはPXと呼ばれるデパートなどが設けられました。現在の名古屋観光ホテルを拠点に市内のビルや施設の接收は、一般市民の住宅にまで及びました。現在の橦木館(旧井元邸)を含む東区橦木町や主税町近辺は、もともと戦前から多くの企業家の邸宅が多かった事もあり、主に将校階級以上の限られた家族用の住まいとして使われました。このような住宅の接收は日米講和条約の締結後、解除にいたるまでの約7年間続きました。

名古屋陶磁器会館(名古屋市東区)には「MADE IN OCCUPIED JAPAN」(占領下の日本製)という文字が記された陶磁器製品がいまなお展示されています。これは、連合国軍の統治による占領下の時代であったためで、日本(JAPAN)という国が、第2次世界大戦の敗戦によって主権を失った事を意味しました。(表紙写真)

井元邸での生活

1951年、10月、進駐軍の第五空軍将校ジャッキー・ロバート一家のメイド

として占領下の井元邸の門をくぐったのは、節子さんが17歳の時でした。節子さんの他のに、ボーイと先輩メイドの女性がふたり。洋館と和館の渡り廊下にベッド



山中節子さん(旧姓戸谷)
(当時17歳) 横木館勝手口にて

井元夫妻との交流

当時その光景を目の当たりにしながら、和館に住んでいたのは、井元為三郎氏の二代目、井元松藏、シユン夫妻とその家族でした。夫妻と将校家族との交流はほとんどなかったといいます。「もしかしたら、住宅を接收された側の家主と接收した側の将校家族が交流する事は許されて

いなかつたのかもしれない。」と節子さんは語ります。

帰国を前に、和館(現在の奥座敷)で、すき焼きを食べたいという将校家族からの申し出を、井元夫妻が快く引き受け、奥座敷を提供し、鍋まで貸してくれた事が一度だけあつたと節子さんは回想します。その後、アメリカ村に職場を移し、メイドとしていくつもの家族の世話をし続けた節子さんのもとに、帰国した家族らから写真付きのクリスマスカードや手紙(表紙写真)が届きましたが、井元邸で世話をしたロバート夫妻とは連絡が途絶えてしましました。

戦後の復興後、高度経済成長を経た現在、多くの古い邸宅が壊されていくなか、井元邸は奇跡的に残り、名古屋市が取得し、平成21年7月に「文化のみち橦木館」として新たに一般公開しました。そのニュースを新聞で知った節子さんが、シュロと樅の木そびえ立つ玄関の前に再びたたずむまでに、実に60年もの歳月が流れようとしていました。館をそっと眺める節子さんの瞳は17歳の少女のようにきらきらと輝いていました。変わゆく時代とともに生き続ける館、橦木館。そこに生きた人々のさまざまな追憶が、これからも連なっていく事でしょう。



現在の山中節子さん
横木館洋館2Fにて

文化のみち橦木館広報

権田由美



(注1)滞在家族用にキッチンや家電にいたるまであらゆる設備が本国から運ばれ、各家庭用に日本語訳付きの料理本が置かれたという。当時使われていたGE社の冷蔵庫は今もなお橦木館の台所の片隅に置かれている。

樟木館と子どもたち

NPO法人樟木俱楽部理事 鵜飼昭年

「樟木館で楽しむ 絵本の世界」展が行われました。その前の週には、山吹小学校の児童による絵画展が開かれていました。樟木館には子どもたちの笑い声やまなざし、それらを慈しみ育もうとする親たちの熱意に満ちていました。

私もこの地域で3人の子育てをする親の一人としてここ樟木館を大いに活用した一人です。何年か前に樟木館で、大掃除を子どもたちと一緒にしました。長い廊下に雑巾をかけることなど初めての体験であつたし、体を動かして空間や材料を実感するということはその子の記憶に深く結びついたことを実感しました。

そのほかにも、お庭で餅つきをしたり、笹船をつくりたり、裏庭で芋とニンジンを育てたり(指定管理者制度になる前のことです)、日本家屋や広いお庭を持たない都市住人にとって、ここは都市におけるオアシスのような場所です。

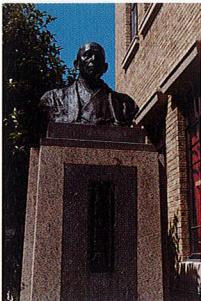
子どもにとってここは、単に見学、鑑賞し、癒される場所というだけでなく児童公園や遊園地では得られない、自ら発見する場所であり探究心を発動する場所ではないかと思います。

樟木館の財産は、モノとしての建築やお庭もそうですが、この場所を使い、出会い、育まれていくコトやヒトが主役なのだと思います。樟木館そのものが図鑑であり、物語であり、絵本であり、そして、それは日々加筆され続けていて、樟木館と子どもを通して私たちも気づかされているのです。



文化のみち界隈の近代建築を訪ねて

名古屋陶磁器会館



赤塚交差点東南角から100mほど南に行くと東側にタイル張りのモダンな建物が目に入る。名古屋陶磁器会館である。竣工は昭和7年。名古屋高等工業学校で鈴木楨次の教えを受けた鷹栖一英が設計。

RC造3階建(3階部分は昭和21年に増築)で、外観にスクランチタイルを使用。1階北面の大きな半円形の窓や軒下の装飾帯は、鈴木流の表現主義的様式。窓枠の周囲に大理石を配した直線的なステンドグラスやアーチ窓、室内のレリーフのある天井や建具などは、アール・デコ様式である。平成20年に名古屋市の景観重要建造物等、国の登録有形文化財に指定されている。

明治期から昭和40年代にかけて東区一帯は、輸出用陶磁器の生産が盛んで、東区内に給付けや貿易に携わる事業所が650軒あった。その工場や事業所のとりまとめに名古屋陶磁器貿易商工同業組合が作られ、事務所として名古

屋陶磁器会館が建てられた。その際の同業者組合長であったのが、輸出陶磁器の「井元商会」を経営していた井元為三郎氏である。

ちなみに「文化のみち樟木館」は、その井元為三郎氏が大正15年から翌年にかけて建てた邸宅である。また、名古屋陶磁器会館の事務所の南側に井元為三郎氏の功績を顕彰して胸像が建てられている。現在、名古屋陶磁器会館では、かつての輸出用陶磁器をギャラリーで展示している。また絵付け教室や、かつての輸出用陶磁器の販売も行っている。

平成23年度 催し物暦（11月～2月）

11／12～11／13
広山流
秋の花をいける

11／16～11／27
第一次大戦ドイツ兵
名古屋俘虜収容所歴史
展と講演会

11／16～11／27
第一次大戦ドイツ兵
名古屋俘虜収容所歴史
展と講演会



12／10
落語じょなくって樂語の会

12／14～12／25
名古屋陶磁器会館 名品展



12／14～12／25
名古屋陶磁器会館 名品展



文化のみち樟木館では、
館主催イベントをはじめ、
貸室利用を年間通して
おこなっています。
当館では
和室・洋室・茶室・蔵・庭を
お貸しします。
詳しくは下記の電話番号、
ファックス番号へ
お問い合わせいただくな
どご覧ください。